

ニホンザルの生態と保護管理



石川県環境安全部自然保護課

は し が き

白山麓の中宮温泉のそばにあるジライ谷で、1960年代に初めてニホンザルの餌付けに「成功」した時、吉野谷村の観光関係者は感動したといわれています。

その時から40年が過ぎ、ニホンザルを取りまく環境は大きく変わりました。一方で、かわいいニホンザルが、白山麓では農産物を荒らす嫌ましい動物になっています。

全国各地のニホンザルの分布地でも、例外なく「被害」に悩んでおり、現在、ニホンザルと人との好ましい関係が問われています。

今あらためて、ニホンザルを知り、ニホンザルと適正につきあうための関係をつくっていかねばなりません。

この小冊子はその参考になれば幸いです。





香、ヤマザクラの花を採良



も く じ

- | | | |
|---|--------------------|-----|
| 1 | 石川県のニホンザルの分布 | 2P |
| 2 | ニホンザルの1年の暮らし | 4P |
| 3 | ニホンザルの一生 | 6P |
| 4 | 被害と対策 | 8P |
| 5 | 保護管理計画 | 10P |
| | ニホンザルを未来に残そう | 13P |

1 石川県のニホンザルの分布

県内でサルが生息している地域は、白山山系の手取川上流域と犀川上流域です。ブナやミズナラなどの落葉広葉樹林が優占する山地帯で、加賀の平野部や能登には現在分布していません。

サルの分布の変遷をみると、明治、大正までは県内に広く分布していました。明治には能登や金沢、小松の奥山にも分布していた記録があります。大正には河内村や鳥越村、金沢の倉谷でも狩りで捕まえていました。

サルは内臓や頭は漢方薬になると信じられていたり、肉を食料にしたため、どんどん捕獲され、サルの数は減ってきました。1960年代には、手取川上流の蛇谷や中ノ川など4つの溪谷と犀川上流域の高三郎山の周辺に残されるだけとなり、サルの数はおよそ200頭と推定されていました。

戦後、白山ではブナ林の伐採が進み、自然がどんどん失われましたが、昭和37年に白山が国立公園として指定され、開発が規制されたことで、自然環境が回復してきました。また、昭和22年に狩猟獣から外されたことで、サルにとって徐々に生存しやすい環境が整い始めました。



初冬、体を寄せ合って暖を取る親子

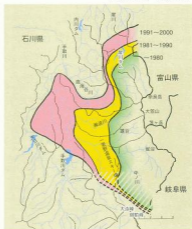
その結果、サルは個体数を徐々に増加させ、2000年現在、約1,000頭を越すまでになりました。

一方、日本が豊かになるとともに、山間地の生活も変化していきました。これまで、炭や薪などの燃料やヒエ・アワな

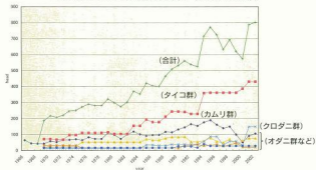
どの穀類や野菜、和紙などの生活資材を作っていた山の生活をやめ、若い労働力が町に移動し、過疎化・高齢化が進みました。

こうした状況下で、ニホンザルはその行動域を少しずつ拡大し、生活しやすい下流域へ進出するようになりました。

ニホンザルの分布域の拡大の様子
(1960年代～2000年)



白山地域のニホンザル個体群の変動 (1966～2002年)



2 ニホンザルの一年の暮らし

白山地域のサルの特徴として、急峻な地形の中を季節移動しながら生活していることが上げられます。サルは草木の葉や種子、果実、昆虫などを採食する雑食性の動物で、植物の生長に伴せ、低地と高地の間を移動を繰り返しながら生活しています。

春、サルは真っ先に雪の消える雪崩跡の斜面に集まり、芽吹き始めたギシギシやミツバアケビ、スゲ類などを採食します。また、森ではブナの若葉やヤマザクラの花などが少しずつ開き始め、それを採食します。この時期、柔らかく、新鮮で栄養価の高い食物をたくさん食べることができるのです。

夏になると、山に食物は少なくなります。ミズキの実、セミやバッタなどの昆虫も採食していますが、多くの植物が生長し過ぎて、硬くなり、食べにくくなるからです。そこで、サルは柔らかい植物を求めて、まだ雪の残る標高の高い所や谷の奥の方に移動します。そこには、芽生えて間もない植物が残っているのです。しかし、一方で一部の群れはおいしい食べ物がある集落周辺に現れ、農作物に被害を与えるものもあります。

秋になると、標高の高い森のブナやミズナラ、沢の周辺にはヤマブドウなどの木の実がなり始め、サルにとってもっとも豊かな季節になります。これらの木の実は秋の深まりと共に徐々に標高の低い所へと移り、



ススキの新芽を
掘り出して採食



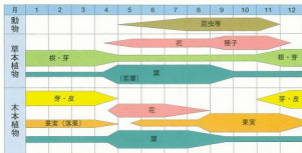
夏、生長し過ぎたクズは
その花や先端の柔らかい
部分を採食



冬、雪の消えた沢筋で
ササを採食

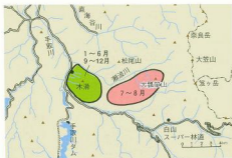
それを求めてサルも降りてきます。

冬は、白山のサルにとって最も厳しい季節です。この時期には、栄養価やエネルギーに乏しい木の皮や髄、冬芽、ササの葉などを食べます。また、雪の切れ目や地肌の現れた所では、秋に落ちた木の実やスゲ、スキの冬芽や地下茎なども採食します。



白山のニホンザルの主な食べ物

(白山の自然誌「ニホンザルの四季」1998より)



タイコA1群の季節移動 (2001年)

3 ニホンザルの一生

サルは、群れで生活しています。この群れは複数のオスとメスによって構成され、群れには決まった行動域があり、この中で食物を求めて移動します。

オスは、青年期を迎える5～6歳ぐらいになると、群れを出て行きます。その後、オスは他の群れに加入したり、オスだけのグループを作ったり、ハナレザルになったりします。なかには、能登半島や加賀の平野部を旅するものもいます。

メスは、一生誰群れから出ることはなく、自分の生まれた群れで過ごします。

行動域を熟知することで、食物がある場所や外敵から身を守る安全な場所が確保されます。また、子ザルたちがこの知識を受け継ぐことによって、繁殖を確実にし、安全に育児することができ、群れが将来にわたって持続されます。メスは、4～5歳になると初めて発情するようになります。厳しい自然環境の白山では、初産年齢は7才程度が多かったのですが、最近の暖冬で、初産年齢は多少若くなっているようです。



少し大きくなると母ザルの背に乗って移動する



母ザルはアカンボウを大切に保護し、しばらくは手元から放したがらない

出産は、一年おきにすることが多く、連続して出産することはまれです。

出産は4～6月にかけて集中します。生まれたアカンボウは、母ザルの胸の毛にしがみついて移動しますが、少し成長すると背に乗って移動するようになります。

アカンボウは生後半年ほどたつと離乳し、木の实なども食べるようになります。その後も1年間は母乳も飲んでいるようです。

子ザル同士はグループを作り、レスリングや追いかっこなどを通じて、群れの集団のルールを学んでいきます。最初は性別にかかわらず遊んでいますが、徐々にオスとメスに分かれていき、オスは群れの周辺にいるオトナオスに引かれる傾向が強くなり、オスグループを作ります。メスはメス同士の集まりを作る傾向が強くなり、アカンボウの世話をする中で、将来自分が子育てすることに役立っていきます。

サルの寿命は、長いものでは25歳を超すこともありますが、厳しい環境の白山地域では、20歳前後の寿命となります。



アカンボウは遊びのグループを作って、群れのルールを身に付けていく



オスの子ザルの遊びは楽しさを増し、夏の暑い時には泳いだり溜ったりと非常に活発になる



離乳しても、一年近くは時々母乳を飲む



メスの子ザルはアカンボウをあやすことで、子育ての練習をしている

4 被害と対策

昭和50年代から、サルの分布域に隣接した集落で、作物が荒らされる被害が出始めました。吉野谷村中宮、瀬波や尾口村尾添などです。この地域は人間の生活圏としては手取川の一支流の中でも最上流域にあたり、サルと人間の接触がもっとも多かったところです。

被害は、手取川の支流である尾添川上流域を行動域にしていた「タイコ群」や瀬波川中下流域を行動域にしていた「クロダニ群」が、個体数を増加させ、分裂を繰り返して下流域に進出し、それに伴い、被害が徐々に広がっていきました。

現在の被害発生地域は、吉野谷村全域、尾口村全域、河内村、鳥越村の一部の山間地に広がっています。農作物被害もトウモロコシや大根など31品目が記録されています（年間被害額は318万円、平成13年度、県農産課調べ）。



初冬、取り残しの力キを採食するサル。これが契機となり、人間の生活圏への接近が加速される

被害を発生させる原因としては、人間の生活圏とサルの生息域との境界が重なり、かつ、サルが人間に対しておそれを抱かなくなってきたことが大きく影響しています。また、山間地の住民意識の変化や産業構造の変化も大きく関係していると思われます。これには、山間地の過疎化による人口減少に伴う労働力の減少や高齢化、山地を利用する出作りや薪炭生産などがなくなったことで集落周辺の山林が放棄され、サルが自由に動き回る空間が増加したことなどが考えられます。

現在、農作物の被害の防衛に様々な方法が試みられています。まずは、耕作地などへの接近を阻止することが第一です。そのために、山への追い払いが行われています。しかし、野生のサルがいつどこに出没するのか予測できないため、サルを捕獲し、発信機を装着して、群れの動向を追跡しつつ、花火や空砲などで威かして、追い上げるのです。一方で、被害を受けやすい耕作地などを電気柵や防護柵などで囲い、サルの進入を回避する対策も実施しています。

最終的な対処として、捕獲して生息地から除去してしまう方法もありますが、この方法は最終手段と考えたいものです。

◆ハナレザルの対応◆

ハナレザルが、街に出没して「騒動」をおこす時がありますが、人に慣れたサルは飼育されていたものか、人為的な影響を強く受けた個体だと思われます。このようなサルは急に人や家に近寄ってきて、怪我をさせることがありますので、注意が必要です。

人を傷すような場合は、捕獲することも必要ですので市町村役場や農林総合事務所にご相談ください。また、餌などは絶対にやらないでください。

被害が発生した主な農林作物

トウモロコシ	ダイコン	金時豆
カボチャ	キュウリ	キャベツ
トマト	ハクサイ	ゴボウ
ナス	タマネギ	メロン
水稲	モモ	イチゴ
スイカ	ネギ	タケノコ
カキ	ミニトマト	ナシ
豆類	ニンジン	リンゴ
大豆	シイタケ	ウメ
サツマイモ	ウリ	クリ
ジャガイモ		



ダイコンの被害



カボチャの被害

5 保護管理計画

石川県では、サルによる農作物被害に対して、従来は「有害鳥獣駆除制度」によって、被害の発生ごとに対応してきました。しかし、サルの個体数調査や分布調査が進まない中、生息状況や被害発生の原因が検討されずに駆除されてきた場合が多く、科学的、計画的なサルの保護管理が必要になってきました。



雪の消えた斜面でスグや落ちた木の実を探して採食

そこで、平成13年度に「特定鳥獣保護管理計画書」が作成され、計画期間を平成14年度から18年度までの5年間としています。

この管理計画における目標は、ニホンザルの健全な個体群の維持と加害群の適切な管理としています。

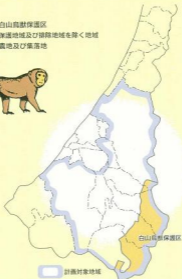
その方策として、①良好な生息地の環境の維持と適正な捕獲数管理による個体群維持、②地域個体群における群れは、保全群、調整群、排除群に分けて保護管理するとしています。具体的には、一時的に被害を発生させている群れについては追い払いの徹底、作物生育期（6～11月）に加害する群れについては、「加害レベル判定基準」及び「被害対策選択基準」（別表参照）に従って捕獲できることにしています。捕獲する場合、繁殖数を抑制するため、主にオトナメスや若メスを捕獲することとしています。また、ハナレザルもその対象とします。

地域区分による取り扱い方は、3つのゾーン分けをし、個体数調整を禁止する「保護地域」、必要に応じて個体数調整をできる「緩衝地域」、被害防除及び個体数調整を中心に対処する「排除地域」としています。

保護管理の地域区分

保護地域 狩猟及び個体数調整は実施しない地域
緩衝地域 個体数調整の実施地域
排除地域 被害防除及び捕獲の実施地域

保護地域 白山鳥獣保護区
緩衝地域 保護地域及び排除地域を除く地域
排除地域 農地及び集落地



一般の方へ

サルには餌を与えないようにしましょう。
ゴミは持ち帰りましょう。

農家の方へ

サルがくる畑は網などで囲みましょう。
畑には、取り残しの野菜などはおかないようにしましょう。
サルには、農作物と捨てられた作物の区別はできません。
追い払う際には、棒などを持って追い払うようにしてください。



加害レベル判定基準及び群れの加害レベルと被害対策の選択基準

加害レベル	出没場所	人に対する反応	農林作物等の被害状況
レベル1	○人家や農地に近い山林内で頻繁に見かける。	○人の姿を見ると逃げる。	○林縁部に自生するカキやクリを食べる。 ○林縁部にあるホダ場のシイタケを食べる。
レベル2	○数頭が、まれに収穫後の農地に一時的に出没する。	○人の姿を見ると逃げる。	○林縁部に自生するカキやクリを食べる。 ○林縁部にあるホダ場のシイタケを食べる。 ○造林木の食害をおこす。
レベル3	○群れ全体が、農地に季節的に出没する。 ○数頭が、まれに人家の庭先にも出没する。	○人の姿を見ても逃げない場合がある。 ○人や車を見ても、追い払わない限り逃げない。	○主に畑の草本類や落ち穂を食べる。 ○庭先のカキなどの果実を食べる。
レベル4	○群れ全体が、農地にほとんど通年出没する。 ○人家に侵入する。	○人を威嚇する行動を見せる。	○果樹、野菜、稲などの農作物を食べる。 ○人の肩などに乗り、持ち物を奪う。 ○かみついたりひっかくなど人身被害をおこす。

※1 山間地の集落とは、人家及び農地が、山に囲まれているか山林と隣接している地域とする。

※2 加害レベルは客観的に判断すること。

群れの加害レベルと被害対策の選択基準（山間地の集落）

加害レベル	被害防除	個体の捕獲	環境整備
レベル1	○追い払い ○シイタケのホダ場は囲うか、人家周辺に移動		○林縁部に自生するカキやクリの除去又は早期収穫 ○因果の埋設 ○農地周辺のヤブの除去
レベル2	○追い払い ○簡易柵の設置	○加害個体の捕獲 ○造林地での被害は、群れの捕獲も検討	○放棄した農作物の除去 ○取り残しの農作物の除去 ○庭の果樹の除去又は早期収穫
レベル3	○組織的な追い払い ○重要な農作物又は大規模な農地は、恒久柵の設置	○加害個体の捕獲	
レベル4		○群れの捕獲	

※ おおよその目安とし、適宜選択すること。

(特定鳥獣保護管理計画マニュアル・ニホンザル編より)

白山地域のニホンザルを未来に残そう

サルは本来熱帯や亜熱帯地域に生息する動物で、北陸地方という多雪地域に生息するサルは非常に特異な存在なのです。特に、白山地域のサルは、寒冷地適応のためもっとも体が大きい長野県の志賀高原などに生息するサルに匹敵する大きさがあります。また、積雪地適応として、群れを一時的に分けて小集団化し、食物の少ない冬に効率よく採食することも知られています。このように、学術的にも、歴史的にも白山地域のサルは貴重な存在であり、未来に残していかなければなりません。

戦後しばらくの間、人とサルの間には良い意味での敵対関係や緊張関係があつて、サルも容易に人の生活圏に接近できませんでした。それが現在、人に脅威を感じなくなったサルが多くなり、その関係が壊れてしまいました。今一度、人は危険な存在だということを認識させるため、徹底した追い払いや威嚇を続けなければなりません。

作物被害がなくなるように努力しながら、共存を図るための地道な活動を今後とも継続することが大切です。

文・写真	太郎田 均
編集・構成	石川県自然保護課
写 真	石川県白山自然保護センター
発 行	平成15年3月

